

楊雄「元后誄」の背景と文體

嘉瀬達男

楊雄（前五三〜後一八）は多くの作品を遺した作家である。その『法言』更に『太玄』は思想史において論じられ、「甘泉賦」「長楊賦」「羽獵賦」「河東賦」の四大賦は文學史において論じられる。『方言』は言語學史上にあつて、多大な意義をもつ書物である。以上の作品が楊雄の代表作であり、既に多數の研究者によつて成果が示されている。

ところがほとんど研究の對象とされていない作品もある。たとえば小論に取り上げる「元后誄」はその一つである。「元后誄」は王莽（前四五〜後二三）の伯母であり、そして元帝の皇后でもある、成帝の實母、王政君（前七一〜後二三）の死に際して作られた哀悼の辭である。『漢書』元后傳に記されている通り、王莽が新を建國した五年後（後一三年）、楊雄六十六歳の時に制作されたことが明らかである。四言にして一八〇句を超える有韻の文であるが、その意義が專論されたことはない。楊雄の最晩年に作られたことが確實であり、王莽との關係をも示す重要な作品であるから、特にその背景と文體の面から考察を加えてみることにする。

誄という文體

まず誄という文體について、「元后誄」が作られる以前の状況を整理しておこう。^①

現存する最古の誄は『春秋左氏傳』哀公十六年(前四七九)に記されている。孔子が卒した際に哀公が賜った「孔子誄」である。^② 表現の據り所となった典據とともに掲げよう(以下同)。

旻天不弔。

あはれ
旻天不弔。ます。

不慙遺一老、俾屏余一人以在位。

おほ
慙らく一老を遺し、余一人を屏ひて以て位に在らしめず。

煢煢余在疚。

あまひ
煢煢として余疚に在り。

嗚呼哀哉尼父、無自律。

嗚呼 哀しいかな尼父、自ら律するところ無し。

○旻天不弔：『詩』小雅・節南山「不弔旻天、不宜空我師」 ○不慙遺一老：『詩』小雅・十月之交「不慙遺一老、俾守我王」

○煢煢余在疚：『詩』周頌・閔予小子「嬛嬛在疚、於乎皇考」

この誄は孔子が世を去り、哀公がただ獨り取り残されたことを嘆くものである。『左傳』では弟子の子貢がこの誄について、哀公が孔子を生前に任用せずに哀悼し、諸侯でありながら「余一人」と天子の自稱を用いている點を非難している。なお、この誄辭について『文心雕龍』誄碑は「觀作(優れた作品)に非ずと雖も、古式存せり」と評している。

ほかに『列女傳』賢明傳に柳下惠の妻が夫の死に際して贈った誄辭が見える。

夫子之不伐兮、夫子之不竭兮、

夫子は之れ伐らざる、夫子は之れ竭きず、

夫子之信誠、而與人無害兮。

夫子は之れ信誠にして、人と害ふ無し。

屈柔從俗、不強察兮。蒙恥救民、德彌大兮。 屈柔にして俗に従ひ、強ひて察せず。恥を蒙り民を救ひ、徳彌々大なり。

雖遇三黜、終不蔽兮。愷悌君子、永能厲兮。 三黜に遇ふと雖も、終に蔽れず。愷悌の君子は、永く能く厲む。

嗟呼惜哉、乃下世兮。庶幾還年、今遂逝兮。 嗟呼惜しいかな、乃ち世を下れり。還年を庶幾ふも、今遂に逝けり。

嗚呼哀哉、魂神泄兮。夫子之諡、宜爲惠兮。 嗚呼哀しいかな、魂神泄れり。夫子の諡は、宜しく惠と爲すべし。

○愷悌君子：『詩』大雅・旱麓「豈弟君子、千祿豈弟」

この「柳下惠誄」は柳下惠が三たび黜けられながら官を去らずに政治に勵んだことを讃え、その死を悼んでいる。『列女傳』には、初め柳下惠の弟子が誄を作ろうとしたのを斷り、妻が作ったとある。そして弟子はこの辭を一字として改められなかったと言う。なお、『文心雕龍』誄碑はこの誄について「辭哀しくして韻長し」と述べている。

「元后誄」以前の誄でその辭が傳わるのは、以上の二篇のみである。そこで簡単に「孔子誄」と「柳下惠誄」を比較し、誄という文體についてまとめておきたい。まず「孔子誄」は一句の字數は不定で、六句のうち三句が『詩經』に基づいている。ただし押韻は認められない。一方「柳下惠誄」は「兮」字を用いた楚辭の形式を備えている。四言句を主とするようだが、助字が多く整然たる四言とは認めがたい。『詩經』に基づくのは一句。そして「孔子誄」に基づき「嗚呼哀哉」「嗟呼惜哉」の句を加えている。

このように兩篇の共通性は容易には見出しがたい。なお誄には嚴格な形式がなかったかのようなのである。『文心雕龍』誄碑も誄の文體につき「誄は、累なり。其の德行を累ね、之を不朽に旌するなり。夏商已前、其の詳は聞く靡し。…誄を讀み諡を定むるは、其の節文大なり」と述べるにとどまっている。

「元后誄」訓注

では楊雄「元后誄」の検討に移ろう。「元后誄」は早く『漢書』元后傳に記され、「(王)莽 大夫楊雄に詔し誄を作らしめて曰はく」として四句が引かれている。次に『藝文類聚』卷一五が「漢楊雄皇后誄」として三十四句を収める。そして『古文苑』(九卷本・卷九、二十一卷本・卷二〇)が百八十二句を収録し、最も備わっている。

先行研究としては『古文苑』章樵注のほか、三種の注釋、譯註が一種あるがいずれも華文であり、出典も含めなお補うべき所があると思われる。そこで以下に原文、訓讀、注釋を掲げながら、検討を進めることとしたい。⑤ 底本には『古文苑』(九卷本)を用い、注は典據の指摘を中心とする。韻字には丸印を附し、韻部と四聲を括弧内に示した。⑥ 左側に傍線を施したのは『藝文類聚』に収録されている部分である。

(一)

新室文母太后崩、天下哀痛、號哭涕泗。思慕功德、咸上柩。誄之、銘曰

惟我有新室文母聖明皇太后、姓出黃帝。

西陵昌意、實生高陽。純德虞帝、孝聞四方。登陟帝位、禪受伊唐。爰初胙土、陳田至王。管相厥宇、度河濟旁。(陽平)

沙麓之靈、太陰之精。天生聖姿、豫有祥禎。作合于漢、配元生成。(耕平)

孝順皇姑、承家尙莊。內則純備、後烈丕光。肇初配元、天命是將。兆徵顯見、新都黃龍。(陽東平)

漢成既終、胤嗣匪生。哀帝承祚、惟離典經。尙是言異、大命俄顛。厥年天隕、大終不盈。文母覽之、千載不傾。

博選大智、新都宰衡。(耕陽平)

新室文母太后崩じ、天下哀痛し、號哭涕泗す。功德を思慕し、咸な柩を上る。之に誄し、銘に曰ふ

惟れ我が有新室文母聖明皇太后、姓は黃帝に出づ。西陵の昌意、實に高陽を生む。純徳なる虞帝、孝は四方に聞こゆ。帝位に登陟し、伊唐より禪受す。爰に初めて土を阡せむり、陳田より王に至る。厥の宇を管相し、河を度り濟に旁らす。沙麓の靈、大陰の精あり。天聖姿を生ずるに、豫め祥禎有り。漢に作合し、元に配し成を生む。孝順なる皇姑、承家して尙ほ莊なり。内則 純備し、後烈は不いに光く。肇初 元に配し、天命は是れ將すく。兆徴 顯見し、新都に黃龍あり。漢成 既に終はるも、胤嗣 生ずるに匪ず。哀帝 承祚し、惟だ典經を離る。尙ほ是れ言 異なり、大命 俄かに顛たふつ。厥の年 夭くして隕ち、大終は盈たず。文母之を贊、千載 傾かず。博く大智を選びて、新都の幸衡あり。

○元后、黃帝、虞帝、陳田、王：『漢書』元后傳「孝元皇后、王莽之姑也。莽自謂黃帝之後、其自本曰、黃帝姓姚氏、八世生虞舜。舜起媯汭、以媯爲姓。至周武王封舜後媯滿於陳、是爲胡公、十三世生完。完字敬仲、奔齊、齊桓公以爲卿、姓田氏。十一世、田和有齊國、二世稱王、至王建爲秦所滅。項羽起、封建孫安爲濟北王。至漢興、安失國、齊人謂之『王家』、因以爲氏」○文母：『詩』周頌・維「既右烈考、亦右文母」○西陵、昌意、高陽：『史記』五帝本紀「黃帝居軒轅之丘、而娶於西陵之女：生二子：其一曰昌意、降居若水。昌意娶蜀山氏女、曰昌僕、生高陽、：是爲帝顓頊也」○登陟帝位：『書』舜典「帝曰『格汝舜、詢事考言、乃言底可績三載、汝陟帝位。』」○昨土：『左傳』隱八「天子建德、因生以賜姓、昨之土而命之氏」○沙麓之靈：『漢書』元后傳「(王翁孫)徙魏郡元城委粟里、爲三老、魏郡人德之。元城建公曰『昔春秋沙麓崩、晉史卜之曰『陰爲陽雄、土火相乘、故有沙麓崩。後六百四十五年、宜有聖女興。其齊田乎。』今王翁孺徙、正直其地、日月當之。元城郭東有五鹿之虛、卽沙麓地也。後八十年、當有貴女興天下。』云」○太陰之精：『漢書』元后傳「初、李親任政君在身、夢月入其懷」○作合：『詩』大雅：大明「文王初載、天作之合」○承家：『易』師「開國承家、小人勿用」○内則：『禮記』内則。○純備：『荀子』正論「(天子)道德純備、智惠甚明」○天命是將：『詩』商頌・烈祖「以假以享、我受命溥將」○新都黃龍：『漢書』王莽傳・中「秋、遣五威將王奇等十二人班符命四十二篇於天下：言文、宣之世黃龍見於成紀、新都：其文爾雅依託、皆爲作說、大歸言莽當代漢有天下云」○大命：『左傳』哀二五「使人逢天之感、大命隕隊」○大終：『易』坤「象曰、用六永貞以大終也」○不盈：『易』坎「水流而不盈、行險而不失其信」

まず初めに極めて短く簡潔な序がある。そして本文は元后の出自から述べ始める。元后は黄帝、虞舜の末裔であり、田完を経て齊の王氏に至つたと述べられ、いずれも『漢書』元后傳に言う通りである。

「沙麓の靈、太陰の精あり…漢に作合し、元に配し成を生む」の四句は、『漢書』元后傳に引用された部分である。「沙麓の靈」は、元后の祖先王翁孺が元城（沙麓の所在地）に移り住んだところ、元城の老人がその地に聖女が生まれるという占卜が春秋の頃にあつたと述べたことを言い、「太陰の精」は元后を身ごもつた時、月（太陰）が胸に入つた夢をみたことを言う。

こうした占卜・豫兆の通り元后は元帝に嫁いで成帝を生み、漢室を榮えさせた。いずれも天命を受けての仕業であつた。更に「兆徴 顯見し、新都に黃龍あり」と言う。かつて黃龍が新都に現れたのは、その地を治める王莽に天命の授けられる豫兆なのである。

「沙麓の靈、太陰の精」「新都に黃龍」のように占卜・豫兆といった怪異を説くが、いずれも『漢書』に記載される通りである。ほかに成帝の後を承けた哀帝は言動が道を外れたために天逝したこと、そこで元后が王莽を拔擢したことが述べられている。全般に經書に基づく用語がまま見られるものの、『漢書』に記された事績が多い部分である。

〔一〕

明聖作佐、與圖國艱。以度厄運、徵立中山。（元平）

庶其可濟。博采淑女、備其姪娣。覲禮高祿、祈廟嗣繼。（脂上）

靡格匪天、靡動匪地。穆穆明明、昭事上帝。弘漢祖考、夙夜匪懈。（支去）

興滅繼絕、博立侯王。親睦庶族、昭穆序明。帝致支屬、靡有遺荒。威被祚慶。冀以金火、赤仍有央。（陽平）

勲進大聖、上下兼該。群祥衆瑞、正我黃來。（之平）

火德將滅、惟后于斯。天之所壞、人不敢支。哀平夭折、百姓分離。(支歌平)

「祖宗之愆、終其不全。天命有託、謫在于前。屬遭不造、榮極而遷。(元平)

「皇天眷命、黃虞之孫。歷世運移、屬在聖新。代于漢劉、受祚于天。(眞平)

漢祖受命、赤傳于黃。攝帝受禪、立爲眞皇。(陽平)

允受厥中、以安黎衆。漢廟黜廢、移定安公。(東冬平)

明聖 佐と作り、與に國艱を圖る。以て厄運を度し、徵して中山を立つ。其の濟ふべきを庶ふ。博く淑女を采り、其の姪婦

に備ふ。高祿に觀禮し、廟に嗣繼を祈る。格りて天に匪ざる靡く、動きて地に匪ざる靡し。穆穆明明、上帝に昭事す。弘

漢の祖考、夙夜 懈るに匪ず。滅びたるを興し絶えたるを繼ぎ、博く侯王を立つ。庶族を親睦せしめ、昭穆の序 明らかかなり。

帝の支屬を致すに、遺荒の有ること靡く、咸な祚慶を被る。冀はくは金火を以て、赤の仍ほ央を有たんことを。勉めて大

聖を進め、上下 兼該す。群祥 衆瑞、正に我が黄 來たれり。火德の將に滅びんとし、惟れ后 斯に于いてす。天の壞る所、

人も敢へて支へず。哀・平 夭折し、百姓 分離す。祖宗の愆、終に其れ全からず。天命の託すること有るも、謫は前に在り。

屬々造からざるに遭ひ、榮 極まりて遷る。皇天 眷命す、黄虞の孫。歷世 運移し、屬するに聖新に在り。漢劉に代はりて、

祚を天より受く。漢祖 命を受け、赤は黄に傳はる。攝帝 受禪し、立ちて眞皇と爲る。允に厥の中を受け、以て黎衆を安んず。

漢廟 黜廢し、定安公に移る。

○徵立中山：『漢書』孔光傳、會哀帝崩、太皇太后以新都侯王莽爲大司馬、徵立中山王、是爲平帝。帝年幼、太后稱制、委政於莽。○淑女：『詩』

周南・關雎「窈窕淑女、君子好逑」 ○博采淑女：『漢書』王莽傳・上「(王莽)欲以女配帝爲皇后：『請考論五經、定取禮、正十一女之義、

以廣繼嗣。博采二王後及周公・孔子世列侯在長安者適子女』…王氏女多在選中者：太后遣長樂少府・宗正・尚書令納采見女、還奏言、公女

漸漬德化、有窈窕之容、宜承天序、奉祭祀』 ○靡格匪天、靡動匪地：『詩』小雅・小辨「靡瞻匪父、靡依匪母」 ○格天：『書』君奭

「在昔成湯既受命、時則有若伊尹、格于皇天」 ○穆穆：『詩』大雅・假樂「穆穆皇皇、宜君宜王」 ○明明：『詩』大雅・常武「赫赫明明、

王命卿士」 ○昭事上帝：『詩』大雅・大明「昭事上帝、聿懷多福」 ○祖考、夙夜匪懈：『詩』大雅・烝民「續我祖考、王躬是保；既

明且哲、以保其身、夙夜匪解、以事一人」 ○興滅繼絕：『論語』堯曰「興滅國、繼絕世、舉逸民、天下之民歸心焉」 ○親睦庶族：『孟

子』滕文公上「鄉田同井、出入相友、守望相助、疾病相扶持、則百姓親睦」 ○昭穆序明：『禮記』祭統「夫祭有昭穆。昭穆者、所以別父子、

遠近、長幼、親疏之序而無亂也」 ○赤仍有央：章樵注「金、劉姓。火、漢德。赤、火之色。有央猶未央也。言冀火德之方中」

○火德將滅：章樵注「莽自以代漢爲土德、色尙黃」 ○謫在于前：『左傳』昭三一「日始有謫、火勝金」杜預注「謫、變氣也」 ○遭不造：

『詩』周頌・閔予小子「閔予小子、遭家不造」 ○皇天眷命：『書』大禹謨「皇天眷命、奄有四海、爲天下君」 ○受命：『書』召誥「惟

王受命、無疆惟休、亦無疆惟恤」 ○攝帝、定安公：『漢書』外戚傳「平帝崩。莽立孝宣帝女孫嬰爲孺子、莽攝帝位、尊皇后爲皇太后。三

年、莽卽眞、以嬰爲定安公、改皇太后號爲定安公太后」 ○允受厥中：『書』大禹謨「天之曆數在汝躬、汝終陟元后、人心惟危、道心惟微、

惟精惟一、允執厥中」

第二段は全てが王莽の事績であり、元后に關する記事はない。『詩經』と『書經』を典據とした表現が非常に多いことが特色である。以下に要旨をまとめておく。

王莽は漢室を補佐して國難を救い、平帝を立て王氏の女を禮に従つて娶らせた。莽の行ないは天地に適い、天下の太平を導き、人々はその餘慶を受けた。漢室を支えようと盡力したものの、漢の火徳は衰え、ついに新の黃徳が起つた。それは天の招いたことである。哀帝・平帝は夭折し、漢朝の命運は盡きた。そして王莽新が天命を受け、孺子の嬰の攝帝となつた後、禪讓され皇帝として建國した。

〔三〕

皇皇靈祖、惟若孔臧。降茲珪璧。命服有常。爲新帝母、鴻徳不忘。欽德伊何、奉命是行。(陽平)

菲薄服食、神祇是崇。尊不虛統、惟祇惟庸。隆循人敬、先民是從。(東冬平)

承天祇家、允恭虔恪。豐阜庶卉、旅力不射。恤民于留、不皇詭作。別計十邑、國之是度。還奉于此、以處貧薄。罷苑置縣、築里作宅。(鐸入)

以處貧窮、哀此發獨。起常盈倉、五十萬斛。爲諸生儲、以勸好學。(屋沃入)

志在黎元、是勞是勤。春巡灞滻、秋臻黃山。夏撫鄠杜、冬卹涇樊。大射饗飲、飛羽之門。綏宥耆幼、不拘婦人。

刑女歸家、以育貞信。玄冥季冬、搜狩上蘭。(貞元平)

寅賓出日、東秩暘谷。鳴鳩拂羽、勝降桑木。蠶于繭館、躬筐執曲。帥導群妾、咸循蠶族。(屋入)

分繭理絲、女工是勸。遐邇蒙祉、中外禔福。自京逮海、靡不仰德。(職入)

成類存生、乘天地經。無物不理、無人不寧。尊號文母、與新有成。世奉長壽、靡墮有傾。著德太常、注諸旒旌。

嗚呼哀哉、以昭鴻名。(耕平)

皇皇たる靈祖、惟れ孔臧なるがごとし。茲に珪璧を降し、命服常有り。新帝の母と爲り、鴻徳忘れず。欽徳伊れ何ん、命を奉じ是れ行ふ。服食を菲薄にし、神祇は是れ崇ぶ。尊くして統を虚しくせず、惟れ祇み惟れ庸む。循きを降くして人敬ひ、先民是れ従ふ。天を承け家を祇み、允恭虔恪。庶卉を豐阜にし、旅力して射さず。民を恤ふること留しく、詭り作すこと皇あらず。別に十邑を計へ、國の是れ度とす。此に還奉し、以て貧薄に處す。苑を罷め縣を置き、里を築き宅を作る。以て貧窮に處し、此の發獨を哀れむ。常盈倉を起て、五十萬斛、諸生の爲に儲へ、以て好學を勸む。志は黎元に在り、是れ勞し是れ勤む。春に灞・滻を巡り、秋に黃山に臻り、夏に鄠・杜を撫じ、冬に涇・樊を卹ふ。大射饗飲す、飛羽の門。耆幼を綏んじ宥め、婦人を拘めず。刑女家に歸り、以て貞信を育む。玄冥季冬、上蘭に搜狩す。寅しんで日の出づるを賓き、陽谷に東秩す。鳴鳩羽を拂ひ、勝桑木に降る。繭館に蠶し、筐を射らし曲を執る。群妾を帥導し、咸な蠶族に循ふ。繭を分け絲を理め、女工是れ勸む。遐邇社を蒙り、中外福を禔す。京より海に逮び、徳を仰がざるは靡し。類を成し生を存し、

天地の經を乘る。物として理まらざるは無く、人として寧んぜざるは無し。尊號文母、新の與たもに成有り。世々長壽を奉じ、墮し傾くこと有る靡からん。徳を太常に著し、諸れを旒旌しよに注さん。嗚呼哀しいかな、以て鴻名を昭らかにせん。

○皇皇：『詩』魯頌・閟宮「皇皇后帝、皇祖后稷」 ○孔臧：『漢書』禮樂志・安世房中歌「告靈既饗、德音孔臧、惟徳之臧、建侯之常」

○玕壁、新帝母：『漢書』元后傳「於是冠軍張永獻符命銅壁、文言、太皇太后當爲新室文母太皇太后」 ○命服：『詩』小雅・采芣「服其命服、朱芾斯皇」 ○伊何：『詩』小雅・小辨「何辜于天、我罪伊何」 ○神祇：『書』太甲・上「先王顧諟天之明命、以承上下神祇、社稷・宗廟、罔不祗肅」 ○允恭：『書』堯典「允恭克讓、光被四表、格于上下」 ○旅力：『書』秦誓「番番良士、旅力既愆、我尙有之」

○恤民：『左傳』襄二六「古之治民者、勸賞而畏刑、恤民不倦」 ○不皇：『詩』小雅・小辨「心之憂矣、不遑假寐」 ○別計十邑、以處貧薄：『漢書』平帝紀「（元始元年）太皇太后省所食湯沐邑十縣、屬大司農、常別計其租入、以贍貧民」 ○罷苑置縣、築里作宅、以處貧窮：『漢書』平帝紀「（元始二年）郡國大旱、罷安定呼池苑、以爲安民縣、起官寺市里、募徙貧民、縣次給食」 ○起常盈倉、爲諸生儲、以勸好學：『漢書』王莽傳・上「（元始元年）莽奏起明堂・辟雍・靈臺、爲學者築舍萬區、作市、常滿倉、制度甚盛」 ○黎元：『漢書』王莽傳・中「（莽）下書曰、余以不徳、襲于聖祖、爲萬國主。思安黎元、在于建侯、分州正域、以美風俗。追監前代、爰綱爰紀」 ○瀚濶、黃山、鄠杜、涇樊、饗飲飛羽、上蘭、鹵館：『漢書』元后傳「（王）莽又知太后婦人厭居深宮中、莽欲虞樂以市其權、乃令太后四時車駕巡狩四郊、存見孤寡貞婦、春幸蘭館、率皇后列侯夫人桑、遵霸水而祓除。夏遊御宿、鄠・杜之間。秋歷東館、望昆明、集黃山宮。冬饗飲飛羽、校獵上蘭、登長平館、臨涇水而覽焉。太后所至屬縣、輒施恩惠、賜民錢帛牛酒、歲以爲常」 ○刑女歸家、以育貞信：『漢書』平帝紀「（元始元年）天下女徒已論、歸家、願山錢月三百。復貞婦、鄉一人」 ○寅賓：『書』堯典「分命羲仲、宅嵎夷曰暘谷、寅賓出日、平秩東作」 ○鳴鳩拂羽、勝降桑木、躬筐執曲、分繭理絲：『禮記』月令（季春）「是月也、命野虞、毋伐桑柘。鳴鳩拂其羽、戴勝降于桑、具曲植蓬筐。后妃齊戒、親東鄉躬桑、禁婦女毋觀、省婦使以勸蠶事。蠶事既登、分繭稱絲效功、以共郊廟之服、毋有敢惰」 ○遐邇蒙祉、中外禔福：『史記』司馬相如傳「難蜀父老」遐邇一體、中外提禎、不亦康乎」 ○有成：『詩』小雅・黍苗「召伯有成、王心則寧」 ○長壽：『漢書』元后傳「（王莽）嚙壞孝元廟、更爲文母太后起廟、獨置孝元廟故殿以爲文母尊食堂。既成、名曰長壽宮」 ○太常：『書』君牙「厥有成績、紀于太常」孔傳「王之旌旗畫日月曰太常」

○太常：『書』君牙「厥有成績、紀于太常」孔傳「王之旌旗畫日月曰太常」

この段では元后のよく政事を補い人々に施したことなどを述べる。『漢書』に記される事績が列擧され、『詩經』、『書經』の語句を鏤めている。以下は要旨である。

王氏は輝き、元后は璧を賜り新室文母となり、命に従い徳を施したのである。衣服・食事は質素にして神を敬い、慎み深く人々を敬った。そして力を盡くして倦むことなく、實りも豊かになつた。十邑を分かち御苑を廢し、土地を拓いて貧民・寡婦を憐れみ、倉を建てて學生を援助した。四季折々には各地を巡り、廣く施しを行なつてゐる。とりわけ婦女子を慰め、養蠶を指導して絲繰りに勵ませた。このようにして地方も中央もよく治まり、民衆は徳を仰いで安らいだのである。元后の新的ために功績を積んだこと、長壽廟に祀り記して永く傳えよう。

〔四〕

享國六十、殂落而崩。四海傷懷、擗踊拊心。若喪考妣、遏密八音。嗚呼哀哉、萬方不勝。(蒸侵平)

德被海表、彌流魂精。去此昭昭、就彼冥冥。忽兮不見、超兮西征。既作下宮、不復故庭。爰緘伊銘。嗚呼哀哉。(耕平)

國を享くること六十にして、殂落して崩せり。四海 傷懷し、擗踊 拊心す。考妣を喪ふがごとく、八音を遏密す。嗚呼 哀しいかな、萬方勝へず。徳は海表を被ひ、彌く魂精を流す。此の昭昭を去り、彼の冥冥に就く。忽として見へず、超として西征す。既に下宮を作し、故の庭に復らず。爰に伊の銘を緘つ。嗚呼 哀しいかな。

○殂落、四海、若喪考妣、遏密八音：『書』舜典「二十有八載、帝乃殂落。百姓如喪考妣、三載、四海遏密八音」 ○傷懷：『詩』小雅・白華「嘯歌傷懷、念彼碩人」 ○擗踊：『孝經』喪親「擗踊哭泣、哀以送之」 ○拊心：『儀禮』士喪禮「婦人拊心不哭」 ○去此昭昭、就彼冥冥、忽兮不見、超兮西征、既作下宮、不復故庭、嗚呼哀哉：『漢書』外戚傳・上、武帝・李夫人賦「超兮西征、層兮不見。麗淫敵克、寂兮無音。思若流波、但兮在心。亂曰：去彼昭昭、就冥冥兮、既下新宮、不復故庭兮。嗚呼哀哉、想魂靈兮」 ○海表：『書』立政「方行天下、至于海表、

罔有不服」 ○下宮：『禮記』文王世子「諸子諸孫守下宮下室」

結びの部分であり、まず皇后となつてより六十年にして没し、國中が悲しんでいることを言う。そして魂魄のこの世を去つて彼方へ赴き、二度とは戻らないことを述べる。生前の事績を記すことの多かつた他の段に比べれば、いささか敘情的である。ただし半ばは『書經』舜典と武帝の「李夫人賦」の語に據つている。^③

「元后誄」の内容と背景

前章の解釋をふまえ、「元后誄」の内容と文體について考察を加えてみたい。初めに内容から検討を始めよう。

「元后誄」に元后への讃辭と哀悼の情が、元后の生涯をたどり、事績とともに述べられているのは當然のことである。むしろそれ以外の事柄は記すべきではない。ところが必要以上に甥である王莽の事績について記述されている。既に指摘した通り、「元后誄」の第二段は全てが王莽の行爲であり、それを稱讚するものとなつてゐる。第二段は五十句あるから、分量としては王莽への讃辭が全體の三分の一弱を占めることになる。

そのようになつた理由の一つが「(王)莽 大夫楊雄に詔し誄を作らしむ」(『漢書』元后傳)という制作事情にあることは言うまでもなからう。葬禮の際に、詔を發して作らせた王莽の眼前で誦讀された可能性さえ考えられるからである。^④

そもそも楊雄と元后の直接の接點は見當たらぬ。兩人が何らかの交渉をもつたとする記録はなく、朝廷勤めの長かつた楊雄とはいへ、直接に接觸する機會がどれほどあつたのかは不明である。それに比べ元后と王莽の關係は簡單なものではない。單なる伯母と甥という血縁以上に政治の世界における關係は深く、元后の死は王莽にとつて重大な

意味をもつ。そこで以下に二人の關係を探つてみる。

まず元后は元帝に嫁し、その子が成帝となつた後、哀帝、平帝と四代六十年にわたり漢室を守つたため、「天下の母」(『漢書』元后傳)と讃えられる人物である。王莽は元后より二十六歳年少であり、漢朝にあつて頭角を現したのはほとんど元后の力に據るものである。

王莽は成帝の時、二十四歳で黃門郎に取り立てられているが、それは伯父の王鳳が元后と成帝に王莽の後見を要請したためである。平帝期には安漢公、攝皇帝となり、孺子嬰を廢して新王朝の建國に至つた。これも元后が勢威を振るつた時期であり、二人は相互に支え合つて外戚政治を進めたのである。そして新を建國した五年後に元后が卒している。

では元后と王莽の關係は良好であつたかといへば、むしろ逆である。王莽が力を蓄えるに従い、兩者の間には次第に軋轢が生じる。最も厳しく對立したのは新を建國した際であろう。王莽は符命を奉じて即位すると、漢王朝統治の象徴である傳國の璽を入手しようとした。當時それを保管していたのは元后である。元后は王莽が漢を滅ぼすことを支持しなかつたので、璽をわたすことを拒否したが、王莽はそれを強引に奪つたのである。元后傳には、傳國の璽を守りきれないと覺つた元后は、璽を地に投げつけたと記されている。

このほか「元后誅」第三段に記された長壽廟は、二人の關係の推移をよく示す存在である。元后傳によつて推移を見ておこう。

初め、莽安漢公爲りし時、又太后(元后)に詔ひ、元帝廟を尊びて高宗と爲し、太后晏駕の後當に禮を以て配食すべしと奏す。莽太后を改號し新室文母と爲すに及び、之を漢より絶ち、體を元帝に得しめず。孝元廟を墮壞し、更めて文母太后の爲に廟を起て、獨だ孝元廟の故殿を置き以て文母の尊食堂と爲す。既に成り、名づけて長壽宮と曰ふ。太后の在あすを以ての故に未だ

之を廟と謂はず。^{①7}

元后は元帝と合祀されるよう漢の制により定められていたものを、王莽は新を建てた後、漢との繋がりを断つために改めて新室文母である元后のために廟を作らせている。そして元帝の廟の元の建物を元后の供物置場とし、長壽宮と名付けたのである。

この記事にあるように、初めは元后に媚びていた王莽は、次第に身勝手な行動をとるようになる。そして「莽篡位の後より、太后の怨恨を知り、太后に媚ぶる所以を求め爲さざるは無きに、然れども愈々説ばれず」という状態に至ったところで元后は逝去するのである。

二人の關係が以上の通りであつたなら、元后の死を知つた時、果たして王莽はどのような感情をもつただろうか。言うまでもなく元后は漢室の血統を作つた女性であり、王莽の庇護者であつた。しかし既に皇帝となつた王莽にはもはや必要ではなく、むしろ目障りな存在となつていたのではないだろうか。そして元后の葬儀こそ漢の血統が拭い去られ、新王朝の確立を存分に實感できた瞬間だつたと思われる。そのような時、王莽の詔に應えた楊雄が、「元后誄」に元后への哀辭のみならず、王莽讚美の語を過剰に書き入れたのは自然なことと言えよう。

なお、楊雄と王莽の關係については古來多くの議論があるが、「元后誄」のほかに「劇秦美新」を表し、『法言』においても王莽を讚美しているのだから、楊雄は王莽を支持していたと考えるのが妥當であらう。一度ならず三度まで稱讚するのであるから、偽りのない心情と見なすべきである。

「元后誄」の文體

次に「元后誄」の文體を見よう。

全體は概ね四言句で構成され、基本的に偶數句の末字が押韻している。そして百八十二句に及ぶ長篇である。以上の點は、「孔子誄」「柳下惠誄」に見られない特色である。

まずこの四言という文體について考えておきたい。楊雄には他に四言の韻文として「趙充國頌」がある。この作品は『漢書』趙充國傳のほか『文選』にも收められている。漢の武帝から宣帝の時代に活躍した趙充國將軍を頌える四言三十二句よりなる有韻の讚辭である。^⑧頌と誄では性質が異なるものの、ともに稱讚を行なう文辭である。そして上書や書簡のような敘事の散文とは異なり、修辭の凝らされた有韻の美文である。

頌や誄のような有韻の修辭的な文體は古代にあつて數多く作られている。それらが「文」と呼ばれ、無韻の「筆」と區別されることはよく知られている。後の資料になるが『文鏡祕府論』（西卷、文筆十病得失）所引の佚名『文筆式』では「文」に「詩、賦、銘、頌、箴、讚、甲、誄」を擧げ、「筆」には「詔、策、移、檄、章、奏、書、啓」を擧げている。ここで「文」に數えられた八種の文體に、兩漢の頃、多くの四言句が見られることは既に注目され、『詩經』以來の四言詩との關係が論じられている。^⑨「元后誄」は四言有韻であるのみならず、典據として『詩經』が最も多かつた以上のことから「元后誄」は「趙充國頌」とともに前漢の詩歌や「文」同様に『詩經』の強い影響の下に作られたと考えられる。

「元后誄」以後、誄は陸續と作られ、嚴可均『全後漢文』には十六篇、『文選』には二卷にわたり八篇の誄が收められている。これらの多くの部分が楊雄「元后誄」を範としているとはしばしば言われる事である。いま注意を喚起したいのは、「元后誄」以前にはほとんど存在していない誄が、「元后誄」以後さかんに作られるようになったことである。「元后誄」以前の誄が殆ど傳わらないのはなぜであろう。誄に關する記述がほとんど見えないことからすると、作ら

れることが少なかったことが考えられる。たとえば作られたとしても、葬禮の際の一過性の文章として破棄されたのかもしれない。いずれにせよ明らかなのは、傳承に耐えうる誄が多くなかったであろうことである。前漢一代を眺めても佚句すら見當たらぬ。「元后誄」ほどに整い、修辭の凝らされた長文の誄は楊雄以前に無かつたものと考えてよいと思われる。ではなぜ楊雄は前例の數少ない誄を作つたのだろうか。理由は王莽より詔を受けたためだけだろうか。

小論の冒頭に記した通り、楊雄は多數の作品を遺している。それは様々な文體の作品である。「元后誄」のほかにも前例の少ない文體もある。たとえば箴である。楊雄は「十二州箴」「百官箴」を著したが、それは先秦の數篇以後途絶えていた文體である。それを楊雄が「虞人之箴」(『左傳』襄四)に基づいて、作成したのである。「連珠」に至つては楊雄が創始した文體である。^②このほか楊雄が取り組んだ文體には辭賦のほかにも頌、設論(「解詡」、銘(「縣邸銘」他)などがある。更に『易經』に模した『太玄』、『論語』に象つた『法言』の文體を考え合わせれば、^③楊雄という作家がどれほど文體への取り組みに意欲的であつたかが理解できよう。

このように楊雄が文體や表現に異様なまでに精力を傾注するのは、辭賦の制作を止めたこととも關係があると思われる。辭賦作家として登用された楊雄がその筆を折る以上、辭賦以外の文體を求めなければなるまい。それが多様な文體への挑戦となつたのではないだろうか。

楊雄が「元后誄」によつて前例の少ない誄という文體に取り組み、四言有韻、『詩經』に基づいた作品に作り上げたことは、その文體や表現に對する意欲を端的に示すものと考えられる。『文心雕龍』誄碑は「元后誄」を「文實に煩穢」と評するが、晩年にあつても厭くことなく文體の追究を續けた楊雄の一面を示す作品であると思われる。

- ① 誄を通史的に論じた研究に福井佳夫「六朝文體論―誄について―」（『中國中世文學研究』一四號、中國中世文學會、一九七九年）や黄金明『漢魏晉南北朝誄碑文研究』（人民文學出版社、二〇〇五年）がある。
- ② 『禮記』檀弓上にも同じ場面が記されているが、誄辭は「天不遺耆老、莫相予位焉、嗚呼哀哉尼父」と簡略になっている。
- ③ 他に『西京雜記』巻上に卓文君が司馬相如のために作ったことが記され、誄辭は明・梅鼎祚の『西漢文紀』巻二二に收められているが、偽作の疑いがあるので今はとらない。『北堂書鈔』巻一〇二には『漢武故事』を引き漢武帝が公孫弘のために誄を作ったことが見え、宋・晁載之『續談助』巻三にはその誄辭が記されているが後世の作であろう。また、誄辭は傳わらないものの『禮記』檀弓上には魯莊公が縣黃父と卜國の二人の勇士に誄を賜ったことが見える。
- ④ 『太平御覽』巻五九六には摯虞の「文章流別論」を引き「詩頌箴銘之篇、皆有往古成文、可放依而作、惟誄無定制、故作者多異焉」とある。また、『論語』述而には「子疾病。子路請禱。子曰『有諸。』子路對曰『有之。』誄曰『禱爾于上下神祇。』子曰『丘之禱久矣。』」という一章がある。ここに言う「誄」は、死者を哀悼する辭と考える説と（集注）、禱の篇名とする説（古注ほか）がある。このような解釋の不一致も誄の形式が不明瞭であったことを示しているよう。
- ⑤ 底本とした九卷本は『古文苑』九卷（一八七九（光緒二十三年、楊守敬刊本）であり、注釋と分段には『古文苑』二十一卷・章樵注（四部叢刊本）、『揚雄集校注』張震澤（一九九三年、上海古籍出版社）、『新譚揚子雲集』葉幼明（一九九七年、三民書局）、『揚雄文集箋注』鄭文（二〇〇〇年、巴蜀書社）、『揚雄集校注』林貞愛（二〇〇一年、四川大學出版社）を参照した。
- ⑥ 押韻の調査は羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究（第一分冊）』（科學出版社、一九五八年）に基づく。韻部に兩韻字を擧げているのは合韻である。
- ⑦ 「備」字を底本は「被」に作るが、『藝文類聚』に據り改める。
- ⑧ ただし『春秋左氏傳』には「秋八月辛卯、沙鹿崩。晉卜偃曰、期年將有大咎、幾亡國」（僖公十四年）とあるのみで、聖女のごときは記されていない。

- ⑨ 「格」字を底本は「格」に作るが、二十一巻本に據り改める。
- ⑩ 「于」字を底本は「千」に作るが、二十一巻本に據り改める。
- ⑪ 「璧」字を底本は「璧」に作るが、二十一巻本に據り改める。
- ⑫ 「十」字を底本は「千」に作るが、二十一巻本に據り改める。
- ⑬ 「勝降桑木」字を底本は「戴勝降桑」に作るが、『藝文類聚』により改める。錢熙祚『古文苑校勘記』も「桑字不合韻」と言う。
- ⑭ 「成」字を底本は「成」に作るが、二十一巻本により改める。
- ⑮ 「李夫人賦」と「元后誄」の比較は福井佳夫前掲論文に行われている。
- ⑯ 『周禮』によれば、誄は大祝の官が作り、『同』大祝、大史が「大喪(王の喪)」に際して「誄を讀み」、『同』大史、「卿大夫の喪」には小史が「諡を賜い誄を讀む」、『同』小史)ものであったという。『漢書』元后傳では「太后年八十四、建國五年二月癸丑(三日)崩。三月乙酉(七日)、合葬涇陵。莽詔大夫揚雄作誄」とあるから、没後一箇月して合葬した際に作らせたものと思われる。
- ⑰ 原文は以下の通り。「初、莽爲安漢公時、又詔太后、奏尊元帝廟爲高宗、太后晏駕後當以禮配食云。及莽改號太后爲新室文母、絕之於漢、不令得體元帝。墮壞孝元廟、更爲文母太后起廟、獨置孝元廟故殿以爲文母尊食室。既成、名曰長壽宮。以太后在故未謂之廟。」
- ⑱ 原文は以下の通り。「自莽篡位後、知太后怨恨、求所以媚太后無不爲、然愈不說。」(『漢書』元后傳)
- ⑲ 『法言』の末尾に「周公以來、未有漢公之懿也。勤勞則過於阿衡。漢興二百一十載而中天、其庶矣乎」(孝至篇)とある。
- ⑳ 『趙充國頌』については既に拙論「論揚雄的(趙充國頌)」(『文選』與文選學、二〇〇三年、學苑出版社)に論じ、『詩經』大雅・常武を典據としていることを明らかにした。
- ㉑ 褚斌杰『中國古代文體概論 增訂版』(北京大學出版社、一九九〇年)第一章・二節「四言體詩的發生和特點」、鄭文『漢詩研究』(甘肅民族出版社、一九九四年)「漢代詩歌」結論、卞孝宣・王琳『兩漢文學』(安徽教育出版社、二〇〇一年)二篇・二章・二節「兩漢文人的楚歌・四言詩及七言詩」など。

㉒ 『文心雕龍』銘箴に「箴者、針也。所以攻疾防患、喻鍼石也。斯文之興、盛於三代。夏商二箴、餘句頗存。及周之辛甲、『百官箴』闕、唯『虞

箴」一篇、體義備焉。迄至春秋、微而未絕。故魏絳諷君於后羿、楚子訓民於在勤。戰代已來、棄德務功、銘辭代興、箴文萎絕。至揚雄稽古、始範『虞箴』、作『卣尹』、『州牧』二十五篇」とある。現存する先秦の箴は「虞人箴」以外に『逸周書』文傳解の「夏箴」二篇、『呂氏春秋』應同の「商箴」一篇などがある。

⑳ 『文心雕龍』雜文に「揚雄覃思文閣、業深綜述、碎文理語、肇爲連珠」とある。

㉑ 筆者は嘗て「法言の表現」（本誌三六・三七號所收、二〇〇三年）において、『法言』が當時廣く行われていた經書の引用をせずに、經書の語を文中に自然に溶け込ませていたことに注目し、楊雄が新たな表現技法を摸索していたと考えた。